



さよならの
ホイツル

米田淳一
Junichi YONETA

神宿駅

北急電鉄神宿駅には、北急百貨店のほうにある中央口・西口・甲州街道口の反対側の南口に新しい「新南口」ができ、乗務員の詰所や休養・執務施設の多くがその新南口に移転している。

「しかし『お隣さん』大変ですね」

「そうだな」

北急の社員は北関東を走る私鉄・北斗鉄道を『お隣さん』と親しみを込めて呼ぶものが多い。関東私鉄の女王と呼ばれる北急に対し北斗鉄道は関東鉄道の王と呼ばれることもあり、またたまたまJRが国鉄だった頃の定期券や指定席券を発見するマルスというコンピュータで、鉄道会社を示すコードが続きの番号だったことと、同じ北という字を使うところをきっかけに友好関係を築いてきた経緯がある。

北急と北鉄は姉妹会社のように互いの会社を尊敬し、親しんでいる。しかし意外なことに資本関係、業務提携関係は全くない。北急ホールディングスはかつての悲惨な状態から持ち直しているが独立系であり、北斗鉄道は地域の自治体や地元銀行グループによる資本でまた独立系でありながら地域の基幹産業である。そこで同じ独立して地域を支え、守るという面でも北急と北鉄は互いを親しく思うのである。

ところが北斗鉄道では事故や不祥事が相次いでいた。フラッグシップだった振り子気動車の脱線火災事故をはじめ、レール破断によるトラブル、異常時運転扱いでの混乱などいくつものことがおき、そのたびに北急のみならず個人的に親交を持つ北斗鉄道の仲間に電話をし、励ましてきた。

そしていま、真新しい新南口は、清潔なパネルとガラスでシンプルにかざられ、終電間際でもまだ人が多い新宿歌舞伎町に近い中央口とは違って独特の静けさに沈みつつあった。

「おい」

その駅で北急ロマンスカーの特急券券売機を閉めていた駅員に声がかかった。

「樋田社長！ どうしたんです！」

運転を終えて詰所に戻る途中の来島運転士も一緒に驚いた。

「ああ」

いつになくやつれた顔の北急の樋田社長に、二人はさらに驚いた。

詰所に入ると、皆があまりのことに、驚いて集まってきた。

「こんなメールが届いた」

社長が携帯を見せた。

from 北斗鉄道社長・鳥飼

to 北急社長・樋田

これでさよならのホイッスルを鳴らすことにした。これまでありがとう。

「驚いて電話したが、でない。北斗鉄道も行方を見失っている。彼はここ数日ずいぶん思いつめていたらしい」

「北斗鉄道社長、失踪？」

「そんな、なんてことを！」

その時、声が響いた。

「まだ終電前だぞ。職務に集中しろ」

奥に陣取って執務中の梅沢指導運転士の声だ。

「でも」

「ほうっては置けないですよ」

何人かがノートパソコンに飛びついた。

「北斗の社長、筋金入りのテツです。それに社用車もそのまま、警察も見失っている。きっと鉄道で」

「でも今は終電まで1時間です！ そう遠くはいけませんよ。それにマスコミが黙っていません。きっと「問題鉄道の社長、逃亡！」とパパラッチして書きたてますよ！」

「落ち着け！」

梅沢がまた腹の底から大声を出した。

「樋田社長、どう思われます？」

「彼は鉄道に乗ったと思う」

皆が頷いた。

「乗り継ぎでさっきから乗ってできるだけ遠くまで行ける列車を割り出しましょう！」

「乗車駅、北鉄本社前、北斗鉄道成平橋駅乗車時刻21:20！」

「俺は表の客扱いやるから、社長を何としても探して！」

「承知！」

みながとりかかった。

「だめです、もう終電間際です！首都圏近郊から出られません！」

「夜行列車があるはずだ！」

「いえ、どれももっと以前に都心ターミナルを発車しています。〈サンライズ出雲・瀬戸〉〈ムーンライトながら〉〈ムーンライトえちご〉など目下みな首都圏を離れ、目的地に入る前の運転停車に入ります！」

「でも何かあるはずだ！ さがそう！ さがすんだ！」

一人が必死にキーを叩き、マウスを動かしている。

「こんなの乗換案内とかじゃ解けるわけがないだろ。頭を使え！」

みなが冷や汗をかき始めた時だった。

「そういえば、北斗鉄道に気動車特急の〈スペース会津若松〉ってありましたよね！ 途中ローカル線をいくつも経由して会津若松までいく私鉄最長の臨時の夜行列車で、たしか今日運転日では！」

「それだ！」

皆が飛びついたが、すぐにうなだれた。

「もう今日出発分はとっくに野岩鉄道に入ってる」

だが、一人が声を上げた。

「その接続列車はまだあるはずです！」

「そうか！ 北鉄伊勢崎線、日光線、鬼怒川線の終電を検索！」

皆が手配する。

「北鉄の社長を探すんだ！」

そのときまた一人が声を上げた。

「久喜、高崎でJRと乗り換えができるんじゃないんですか」

「そうだ、久喜だったら東北本線でJRの北斗星は無理でもうちの周遊列車〈ブラウンコーストエクスプレス〉に乗れるかも！」

「ブラウンコーストのチームに連絡！」 「はい！」

「高崎なら信越本線周りの青森行きJRの寝台特急〈あけぼの〉に乗車できる！」

「JRに照会！」

「でも」

一人がうつむいた。

「北鉄の社長、夜が明けたらどうするかわかりませんよ」

「なに言うんだ、警察に保護してもらえば」

「でも保護してもらっても、マスコミは更に叩きますよ」

声が響いた。

「俺が行く」

樋田社長だった。

「俺がへりで迎えに行く」

「本当ですか！」

「ああ。絶対にアイツを保護する。だから列車を割り出してくれ」

皆、身が引き締まった、

「はい！」

「調べるんだ！」

ホワイトボードが詰所内に置かれた。

「調べましたが、成平橋21:18分発、となりの浅草へ北斗鉄道で一駅、東京メトロで上野まで5分、上野から上越新幹線「Maxとき353号」で22；39分高崎着、寝台特急〈あけぼの〉の高崎発は22:48です。間に合います」

「ですが、それで寝台特急〈あけぼの〉のどこで途中下車されるかわかりません。それに列車は現在信越本線を通り、日本海岸に到達します。そうなったら社長の足取りが不明になり、マスコ

ミは避けられても社長が何をするか」

「いや」

樋田社長は頷いた。

「行こう。ヘリを用意してある」

「どこへ？」

「わかったさ。彼の目論見と、それを阻む全てが」

樋田社長はみなとともに社長車のミニバンで東京ヘリポートへ向かった。

埋立地のヘリポートで、海風の中、チャーターヘリがすでに待機し、エンジンを回していた。

「急ぐぞ！」

樋田が先頭に走っていくその時だった。

「来島、お前もこい！」

樋田社長がヘリの騒音の中、叫んだ。

「私ですか？」

来島は驚いた。

「いいから来い！」

来島は乗りなれないヘリの轟音の中、頭上を回転するローターを恐れて背を縮めながらキャビンにたどり着くと、それを樋田が引きずり込んだ。

そしてすぐにイヤマフをかけさせ、スライドドアを閉めてパイロットに「機長、お願いします」と声をかけた。

ヘリはすぐに樋田と来島を載せて、力強く夜空に離陸した。

みながヘリを見送る。

だが、

「ええっ！」

ヘリは、離陸すると機体を傾けて、北ではなく真西に向かうのだ。

「そっちじゃないでしょう！」

皆が口々に叫ぶが、ヘリはかまわず西へグングンと飛んでいった。

へりのなかでは防音素材で低められたとはいえ、ターボエンジンの響きが常に鳴り響いている。

機内で、来島は戸惑っていた。

目の前に見えていた東京の夜景は、ぐいぐいと上昇するへりから視野角度を変えながらも節電で少し暗いらしいのだが、しかしそれでも来島は感想も何も言えなかった。

あっという間にへりは高く舞い上がり、空がすぐに白んできた。

来島は、乗りなれないへりの速さと轟音に頭が追いつかない。

そのうえエンジンの響きの中、樋田はグッと堪えた表情で無言で、来島もそれで何も言えなかった。

だが、樋田が切り出した。

「種明かしをしよう」

樋田社長は持ち込んだアタッシュケースからiPadを取り出し、地図を表示した。

「私も途中まで全く見当もつかなかった。鉄道全線に精通するには私は鉄道知識が不足している。いや、現代の鉄道網はあまりにも複雑すぎる。

とくに首都圏から脱出するまでは」

来島は生返事のように頷いた。

「まず新幹線で前橋、そこから寝台特急〈あけぼの〉までは正解。

ただその先に、君たちも想像もつかない列車がいる」

「日本海縦貫線の〈日本海〉や〈トワイライトエクスプレス〉ですか？」

「一瞬それを思った。寝台特急〈あけぼの〉は、信越本線を抜けて長岡で長時間運転停車をする。

だが〈日本海〉は長岡の通過時刻が合わないし、〈トワイライトエクスプレス〉札幌行きは長岡を18:58ですでに通過しているし、大阪行は5:29に通るので時間が離れすぎている。そんな乗り継ぎではそれまでに同じ推論をしたマスコミや手のものが追いついてしまう。」

「じゃあ、何を」

「いや、アンフェアな手かもしれないと思ったんだが、走っているんだから仕方が無い」

樋田はiPadの上で指ををスライドさせた。

そこに現れたのは、ブドウ色につつまれて金線を走らせた車体に大きな窓が繊細な豪華寝台列車だった。

「〈ファンタジーコーストエクスプレス〉。我が社の〈ブラウンコーストエクスプレス〉に続く第2の新クルーズトレイン、豪華周遊列車で、目下慣熟試運転をしながら九州へ向かっている。その試運転通過時刻は、すでに鉄道ファンには知られている。これも長岡でちょうど運転停車する。時刻はちょうど寝台特急〈あけぼの〉の運転停車と重なる」

来島は言葉を失った。

「その〈ファンタジーコーストエクスプレス〉の目的駅は、下関駅。

そこでその列車の運転開始記念披露パーティーと記者会見がある。

そこで彼はすべての真相を明らかにするつもりなんだ」

「真相？」

「ああ。

北斗鉄道が経営が苦しいというが、誰がそれを苦しめている？

路線長の長いあの鉄道の脇に無料の高速道路と、航空券だけは格安だけど維持の採算に合わない空港を作りまくった連中が」

「運輸族！」

「ああ。彼らはそういう高速道路会社や空港会社にさんざん縁故で理事の奥さんや親族一同をさんざん重役で入らせて、実態のない仕事に高額給料を人件費として計上して国交省の予算、血税にたかりまくった。

そしてかつて採算に合わず廃線の危機にあった北斗鉄道が必死に復活しようとした努力の足を引っ張った。

その上、東京の多くの私鉄でも密かに起きているような小さな不祥事を徹底的にオーバーに報道した。

そして、とどめがあの列車の火災事故事件だ。

危機でも無事に脱出させられた幸運よりも、その幸運をもたらした粘りのある車両の防火耐火設計は抹消され、全て批判にすり替えられた。

そして労使関係に介入し、労働組合の一部の過激派を裏切らせ、「北鉄での不正」として日本全国で起きている交通行政のゆがみを北鉄だけの問題として告発させた。

狙いは北鉄社長が全て知っているその運輸族の実態を記した記録だ。

彼はそのすべてを知り過ぎていた。だから追い詰めたんだ。運輸族は。

彼は逃げ出し、私とともに交通行政の無策と腐敗を告発しようとしている。

日本の交通行政を破壊して、信じ愛する鉄道と、それが走る地域を守るつもりなんだ。

だって、ただ苦しくて責任から逃げたいだけだったら、ロープ一本あればそれはできることだろ？

彼はそうでない道を選んだんだ。この旅で」

夜が明けてきて、へりの客室内も明るくなってきた。

終着駅

へりを降りて下関駅のホームで待つ二人の前に、車体のブドウ色2号に金帯を輝かせた豪華周遊列車・〈ファンタジーコーストエクスプレス〉が到着した。

それに、彼、北斗鉄道社長が乗っていた。

「樋田、すまない」

「いや、すまないのは私の方だ。

なぜなら、この記者会見は、中継もされないし、ニュースにもならないんだ」

「ええっ」

樋田はケータイのワンセグTVのニュースを見せた。

『経産大臣のこの不用意な発言に野党と被災地からの激しい批判が相次ぎ、大臣は辞表を提出、総理はそれを受け取り、後任大臣の人事作業に入っています』

「大臣を首にしてでも、これを守る気なのか！」

彼は切り札だったはずのUSBメモリを手にしていた。

「ああ。俺達の敵は、それぐらいとんでもない。

君の情報をこれから流しても、ウェブの匿名のバカどもの誹謗中傷とまぜこぜにされてしまう

。

君の最後の戦いは、こうして終わる」

「ちくしょう！」

彼は何度もさげんだ。

「こんなことのために、おれは！」

彼は荒れた。

「大切なお客様も仲間もこんな目に追い込んで、なにが公共交通の推進だ！ モーダルシフトだ！ ノー政とよばれた農業政策の無策よりもっとひどいじゃないか！

ちくしょう、ちくしょう！」

「気持ちはわかる。

だが、言ってもダメだ。

それでも俺は、多忙な君に我社の誇る豪華列車・〈ファンタジーコーストエクスプレス〉の旅をこんな形だがプレゼントできて俺は幸せだ。

しかも、君は北鉄の社員を放り出すわけには行かないだろう？

俺には北急の沿線のお客様と、そして大切な一人一人の社員がいる。

俺が地獄に堕ちるなら、一緒に地獄に堕ちて、一緒に地獄でもまた電車を走らせたいとまで言ってくれる鉄道員の仲間が。

そういう仲間が、君にもいる筈だろ？

だいいち、ただの乗っ取り銀行屋だった俺に、こういう鉄道経営の面白さを教えてくれた仲間の中の一人が君だったじゃないか。

一緒に鉄道を走らせよう。鉄道屋として。

そして、いつかJR経由でもいい、お互いの社の沿線を結ぶ列車を走らせよう。

その日まで、その胸の思いはこらえよう」

北鉄の社長は泣いた。

「狂った世の中だ。

震災によってそれが更に狂った。

でも、俺は決めたんだ。

何があっても、誰を失っても、最後まで屈服はしないぞと」

彼も頷いた。

「鉄道屋として、鉄道を走らせ、走らせ続けて、何気ない日々を守る。

それが俺たちの本来の仕事で」

樋田は口にした。

「それが、今の俺たちの、戦いなんだ」

瀬戸内の朝日をうけた〈ファンタジーコーストエクスプレス〉の車体の艶と金帯が、キラリと力強く輝いた。

そして、遠くでホイッスルが鳴った。

<Endtext>

さよならのホイッスル

<http://p.booklog.jp/book/34379>

著者：米田淳一

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/yoneden/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/34379>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/34379>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.